

第2章 遺 跡

中村徹也 泉 拓良 千葉 豊

1 調査の方法

発掘調査は、事前に方形の地区割りを設定しておこなった。将来、植物園全域における発掘調査が必要になる可能性を考慮して、植物園南端の中央寄りに基準点（Q-10）を設けた。この基準点と真北の基線をもとに10m四方を単位とする方形地区で植物園全体を覆った。東西方向はアルファベット、南北方向はアラビア数字により表示し、地区名は各地区の東南隅の表示で代表させることにした。1地区内は、さらに5m方眼に4区分し北へ1・2、西へa・bと表示した（例 R-10・a-1区）。この最小5m四方の小地区に基づいて、歴史時代の遺跡を対象とした第1次調査を実施した。

第2次調査の先史時代遺跡の調査の際は、遺構の存在する可能性が高く、また土器・石

器などの遺物の埋存状況が非常に密であることを予想して、歴史時代の発掘区画より地区割りの単位を小さくすることにした。ちょうど南北の「S-b」のラインが先史時代の調査区画のほぼ中央を縦断していたため、この「S-b」を南北方向の中軸線として東西南北に3m四方を単位とする地区割りを設定した。地区名は、アルファベットと数字を用いて表示することにした。最も東の地区をaと表示し、西へ順次、b, c, dとした。最も南の地区を1と表示し、北へ順次2, 3, 4, 5として、地区名はアルファベットと数字を組み合わせて呼ぶことにした（図

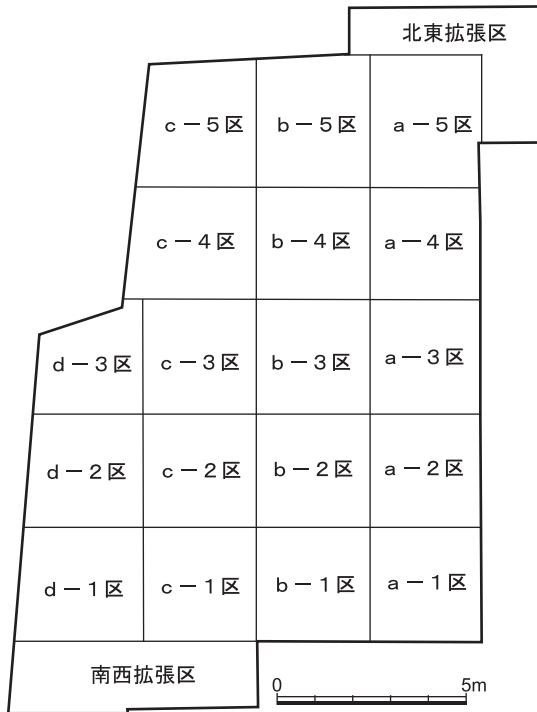


図3 先史時代遺跡の調査区の地区割り

3)。なお、調査でみつかった配石遺構を移築復元することが決定しその準備として第3次調査をおこなった際に、調査区北東隅と調査区南辺の西半分を2m前後拡張して調査をおこなった。これを便宜的に、北東拡張区および南西拡張区と呼ぶことにする。

2 層 位

調査地域は北白川扇状地の南端部で、西へ下る扇状地の末端近くに位置する。ただし縄文時代以前の自然堆積の砂層および礫層をみると、必ずしも白川系の堆積層だけではなく、高野川系の砂礫層も観察されるので、高野川系流路がこの付近を流れていた時期があることがわかる。現地表の標高は約66m。東西方向の層位を図4に示す。

層位はおおむね整合の水平層であり、地表下約1.2mにみられる厚い黄色砂をはさんで上下の層群に大別できる。上層群の層位は、上から表土（第1層）、床土（第2層）、灰褐色土（第3層）、赤褐色土1（第4層）、褐色土（第5層）、赤褐色土2（第6層）、暗褐色土（第7層）、灰褐色土（第8層）、赤褐色土3（第9層）、黒色砂質土・黒色粘土（第10層）となる。

第3層の灰褐色土と第4層の赤褐色土1、第5層の褐色土は近世の遺物を包含しており、耕作関連の地層であろう。第6層の赤褐色土2は厚さ約15cmで固くしまっている。中世の遺物を包含するが、遺物量は比較的少なく、土器片・瓦片のほか貨銭が出土している。第7層の暗褐色土、第8層の灰褐色土、第9層の赤褐色土3は、平安時代の土器片・瓦片を包含する。第10層の黒色砂質土は厚さ約40cmで、ほとんど遺物を包含していない。ただし隣接する調査地点の層位と出土遺物から奈良時代の地層と推定できる。西へ向かって次第に深くなり粘土質に変化しているのは、西側に滞水凹地があったことを示している。

第11層の黄色砂は、約80～120cmの厚みで調査区全面を覆っている。調査当時は、弥生時代以降、奈良時代以前の白川系流路であることまで絞られていたが、その後の調査によって、弥生前期末に発生した土石流をともしう堆積物で、吉田キャンパス一帯を広く覆ったことが明らかになり〔泉1978・清水1985〕、その規模や発生時期・発生要因などに関して検討が加えられている〔富井2005〕。

下層群の層位は、上から黄褐色粘質土（第12層）、暗褐色粘質土（第13層）、黒褐色粘質土（第14層）、青色・黄色砂（第15層）、赤色酸化鉄付着砂（第16層）となる。図では表現されていないが、第11層の黄色砂の直下に黒褐色土の薄層が存在している箇所があり、弥生土器と縄文晩期土器の小片がわずかに出土している。第12層の黄褐色粘質土と第13層の

層 位

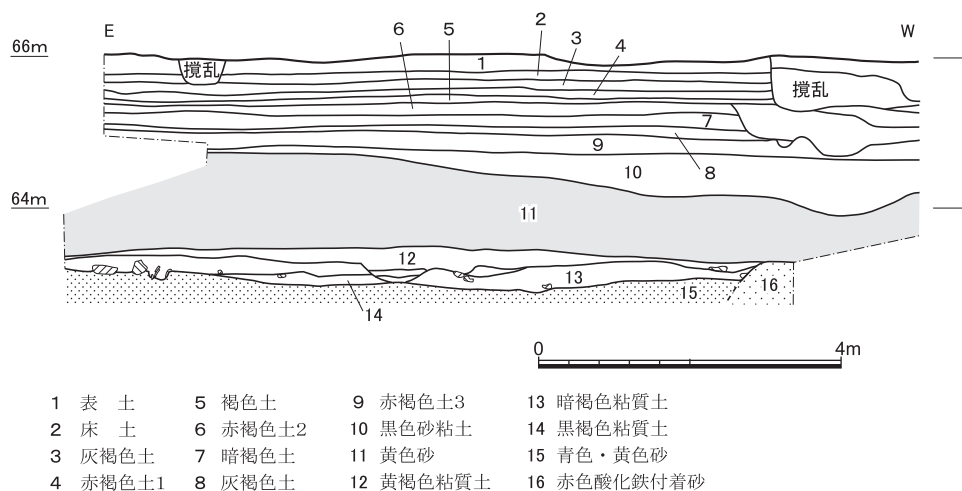


図4 東西方向の層位 縮尺1/100

暗褐色粘質土はどちらも粘質の土層で、部分的には複雑な堆積状態を示しているが、これは地山の凹凸の激しさによるものと考えられる。ともに縄文後期の土器および石器が包含されており、第13層下面で配石遺構および埋設土器を検出した。両層から出土した土器は摩滅が少なく、破片も大きく、また近距離で採集されたものが互いに接合でき、このことからみて原位置をそれほど遠く動いていないものと推定できる。したがって遺構が廃棄された後の自然の流れにより微低地に溜まったようである。第14層の黒褐色粘質土は部分的な堆積で第12・13層と同様に縄文後期の遺物を包含する。

第15層・第16層の砂層はこの地一帯の基盤となる堆積物で、遺物を包含せず文化層は存在しないと判断した。縄文時代生活面の基盤となった砂礫層は凹凸が激しく、縄文遺物を包含する堆積は、この凹地に多く集積しているようである。調査地域の西端は砂礫層が急に高くなっており、一時期の中洲状の微高地と理解できる。縄文時代遺物の包含層はこの高い部分には堆積していない。したがって縄文遺跡は、その多くが北から東、さらに南にかけて広がっていると推定される。

3 縄文時代の遺構

(1) 遺構・遺物の出土状況

白川の運んだ厚い黄色砂（第11層）を掘りぬくと黒褐色の薄い粘質土層にあたる。縄文晩期と弥生前期の土器をわずかに包含する。発掘当時、この砂層と粘質土層との間が地下

水位となっていた。おそらく砂層の堆積が始まったと同時に地下水は粘土質の土をベースにこの水位を保ち始め現在に至ったと考えられる。調査にとっては非常に悪条件となったが、この地下水のため有機物とくに植物遺体が良好に保存されることになった。砂層下面から黒褐色土内にかけて流木・立木・倒木および木の葉・木の実類、さらに昆虫などの動物遺体まで多量に検出された（図版2-1）。このとき、取り上げた植物遺体は整理作業の不手際で現在、残っていないが、扇状地の末端に植物遺体をはじめとする有機遺物が良好に残存しているという経験は、その後、北部構内で発見された低湿地遺跡の調査に役立つことになった。

第12層の黄褐色粘質土からは、縄文後期の土器や石器が発見されたが、遺物の包含度は比較的低い。この層の下面では南地区のa-1・a-2, b-1・b-2, c-1・c-2区に集中して不定形な土坑が多数検出された。これらの土坑は、おおむね円形ないし楕円形を呈していて順次重なって掘られたため、最終的には不定形を呈していると考えられる。円形のもので径約60～80cm、楕円形のもので長径約80～100cm、短径約40～60cmの大きさである。土坑群は環状にめぐっており、全体として一つのまとまりを有しているようにもみえる。それぞれのピットの中には土器を伴出するものと、伴出しないものがある。伴出していると思えるものも流れ込んだ可能性が高い。

これら土坑群が検出された南半区を除く北半区は凹凸のない平坦面が広がっており、流木や倒木・木の根などが多く発見されている。

第13層の暗褐色粘質土は厚さ20cm前後で、多量の縄文土器および石器を包含していた。図5は、土器の分布状況を調査区ごとに出土頻度として示したものである。b-4区・b-3区を中心に、その東西の地区に出土の中心があることが読み取れる。

多量に出土した土器片は、ローリングによる摩滅をほとんど受けておらず、比較的大きな破片が多く、かつまた同一個体の破片が接近したりまとまって発見されている。このことからこの場所は、縄文時代の単なる遺物包含地ではなく、住居域・墓地などの生活遺跡に非常に近いことが想定された。

こうした想定どおり、第13層下面をベースとして、配石遺構10基と土器を埋設した遺構（以下、「土器埋設遺構」と呼称）7基が検出された（図6）。

配石遺構は大体等間隔を保って調査地域の南約3分の2の範囲に東南隅を扇の要として弧を描くような状態で分布している。それに対して土器埋設遺構は北3分の1の地区に分布し両者は明確に区域を異にしていた。

縄文時代の遺構



図5 調査区全体に対する地区別土器出土頻度

(2) 配石遺構

自然石が密集し、人為的に配置されたと考えられるもの10基を配石遺構として認定した。調査区南半に偏る傾向にある。平面および立体における形状から、A・Bに二大別し、下部構造（土坑および土器埋設の有無）で細分して記述する。

Aタイプは、人頭大の自然石を20～30個用いて円形ないし楕円形に密集させているもの。積石状に石を重ねているものもあり、立体的な構造をもつ。径約1.0～1.3mで大きい。下部に土坑をもつA1、埋設土器をもつA2、なにもみられないA3に細分できる。

Bタイプは、人頭大の数個ないし10数個の比較的少ない自然石を用いて不定形に敷きつめたもので、積石状に石を重ねることはなく平面的である。Aタイプに比べて規模は小さく簡素である。埋設土器をもつB2と、なにもみられないB3に細分できる。

配石Ⅰ号（図版6・7、図7） 調査区南西辺のd-1区に位置する。人頭大の自然石20個以上を径1.4mのほぼ円形に密集させ積石状に構築している。最初に据えられたとみられる中央の2つの石は互いに中央で接していたが、その接点が下方にずれていた。このため、配石下の調査をおこなったところ、短径60cm、長径70cm、深さ30cmの土坑が検出され、土坑の埋土から、骨片と無文土器の破片が発見された（図版7-1）。配石のすぐ西側には、長さ70cm弱、最大幅25cmの棒状の自然石がすばまった端部を配石側へ向けて出土している（図版7-2）。その形状から、配石上部に据えられた石柱（標石）としての機能をもっていた可能性も想定できる。A1タイプの配石である。

配石Ⅱ号（図版7、図8） 調査区中央やや南寄りのb-2区に位置する。長軸を北西-南東方向に向け、長軸1.7m、短軸1mほどの範囲に、人頭大の自然石、約20個を楕円形に密集させる。A3タイプの配石である。

配石Ⅲ号（図版8、図8） 調査区南東辺のa-1・a-2区の境界に位置する。南北1.5m、東西1.2mの範囲に、人頭大の自然石、約20個を楕円形に密集させる。配石中より、骨片が出土している。A3タイプの配石。

配石Ⅳ号（図版8・9、図9） 調査区中央東辺のa-3・a-4区の境界に位置する。B2タイプの配石で、下部に土器を横位に埋設している（土器埋設5号）。上部の配石は10個程度の自然石を南北0.6m、東西0.8mの狭い範囲に平面的に置いている。西に接して、土器埋設3号が位置する。

配石Ⅴ号（図版10、図10） 調査区南西辺のc-1区に位置する。人頭大の自然石7個が南北1m、東西0.7mの範囲で、弧状に認められるが、西側が失われており、本来は

縄文時代の遺構

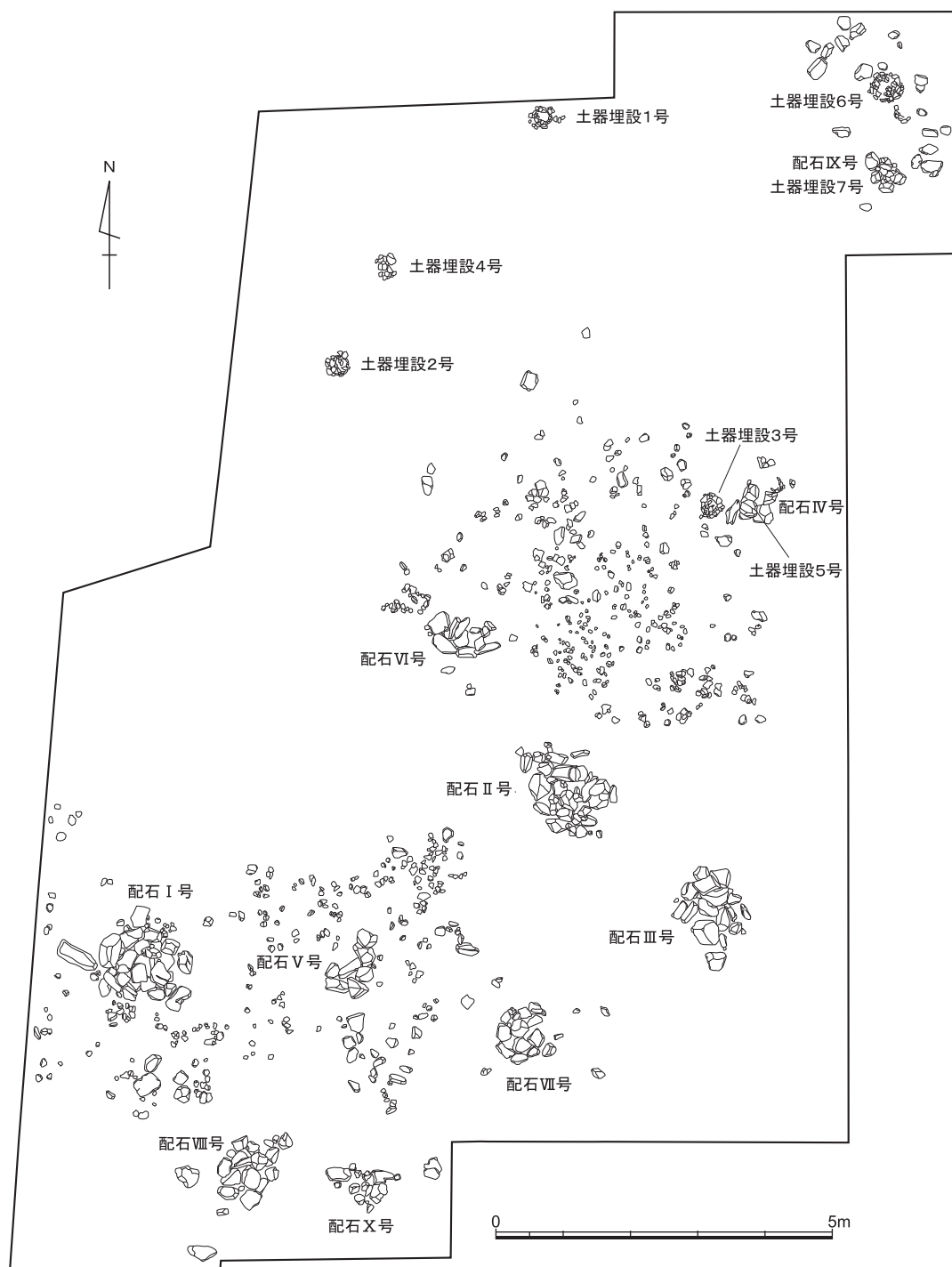


図6 遺構全体図 縮尺1/100

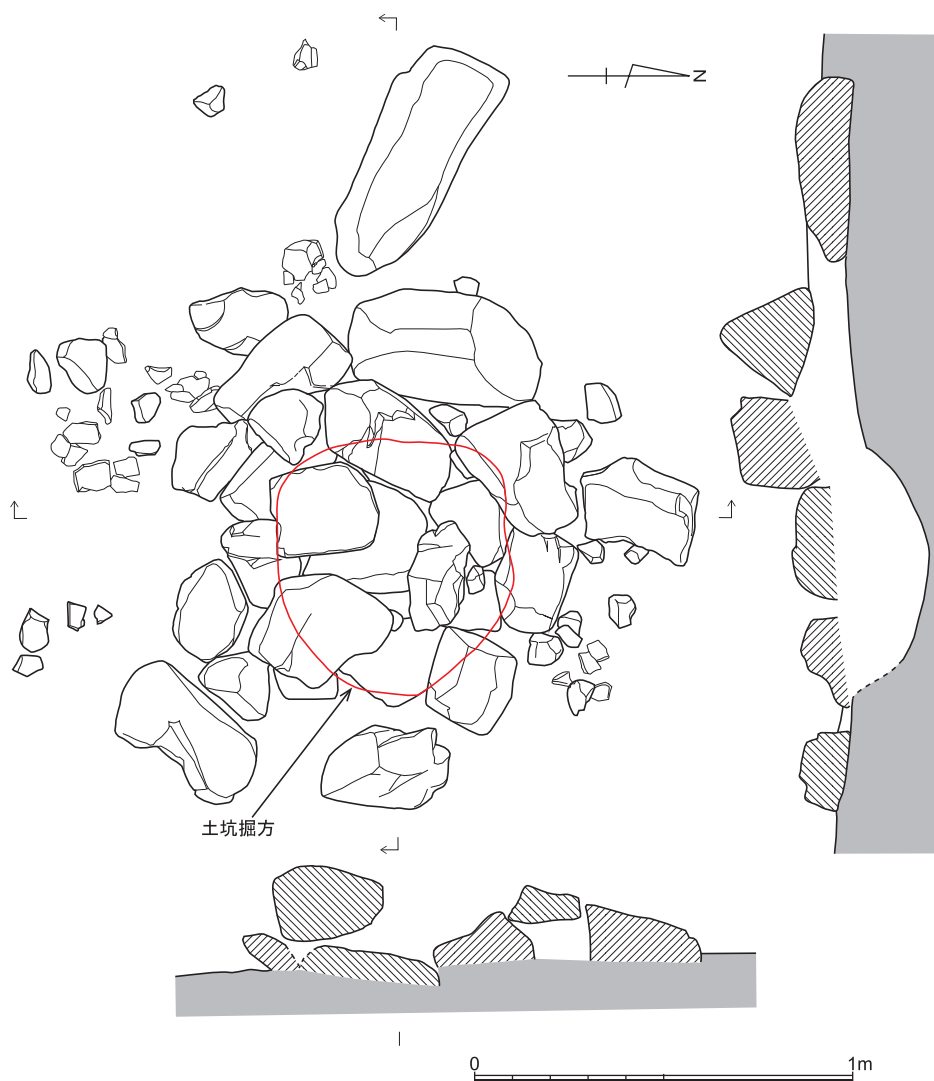


図 7 配石 I 号 縮尺1/20

円形に近く配列されたものかもしれない。B 3 タイプの配石である。

配石Ⅵ号 (図版10, 図10) 調査区中央の b-3・c-3 区の境界に位置する。南北0.7m, 東西 1 m の範囲に自然石を敷設するが, 中央に棒状あるいは小ぶりの礫を置き, 西側から南側の周囲に, 長軸方向で周囲を画するように人頭大の礫が置かれている。北側から東側にも周囲を画する礫が存在したことも考えられる。骨片出土。B 3 タイプの配石である。

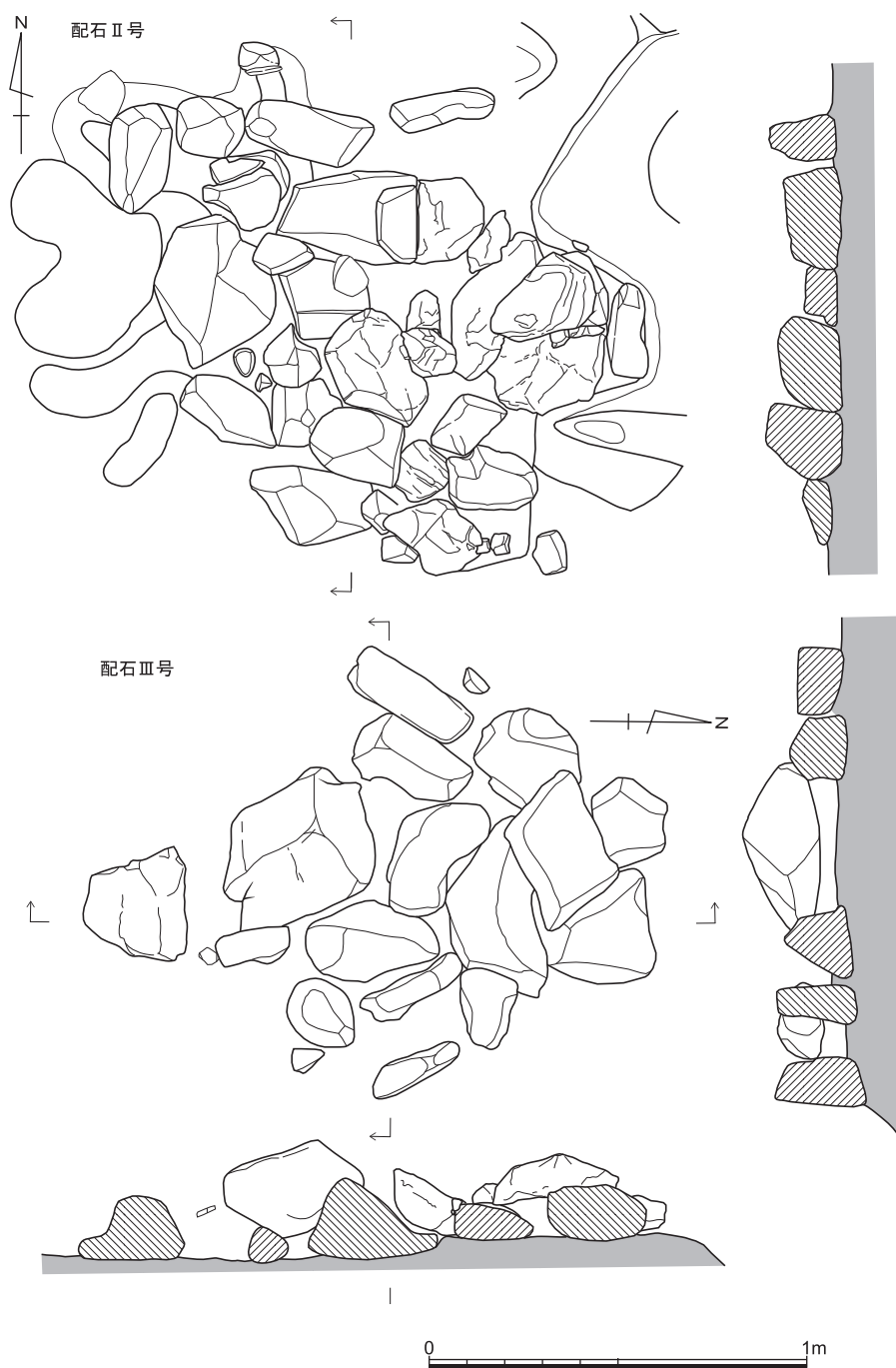


図8 配石Ⅱ号, 配石Ⅲ号 縮尺1/20

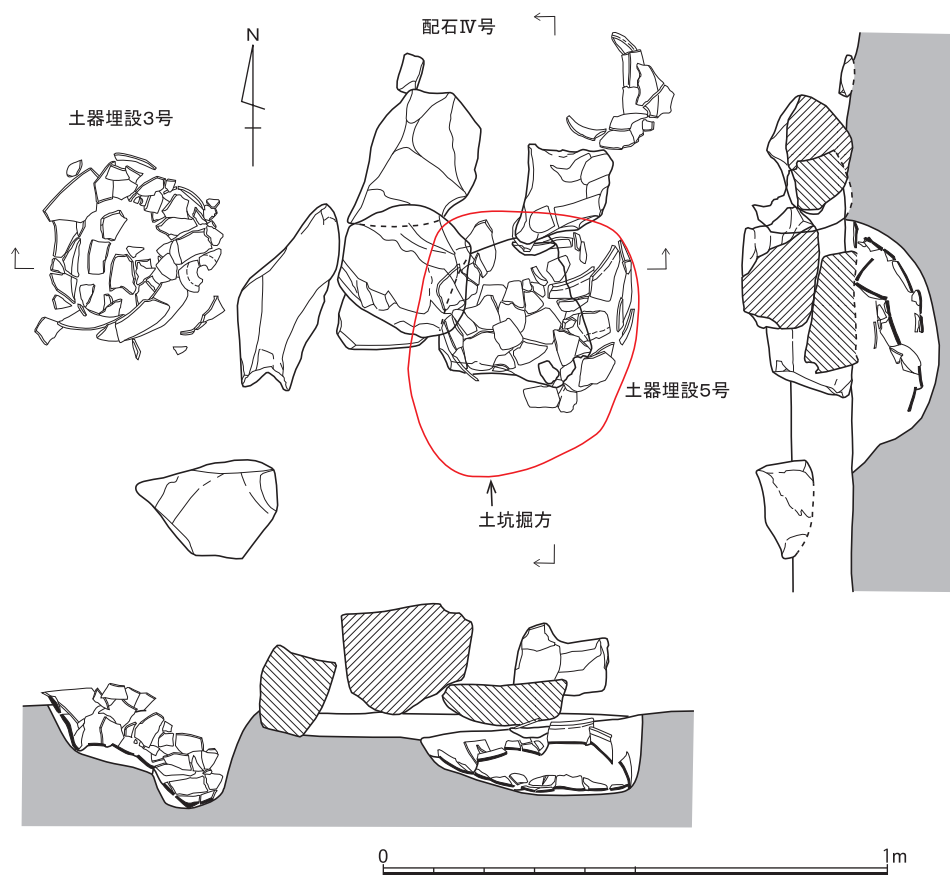
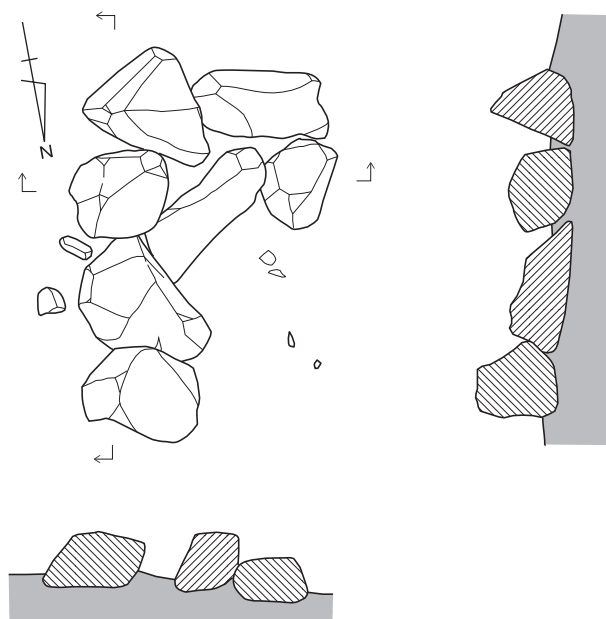


図9 配石IV号，土器埋設3号，土器埋設5号 縮尺1/15

配石V号



配石VI号

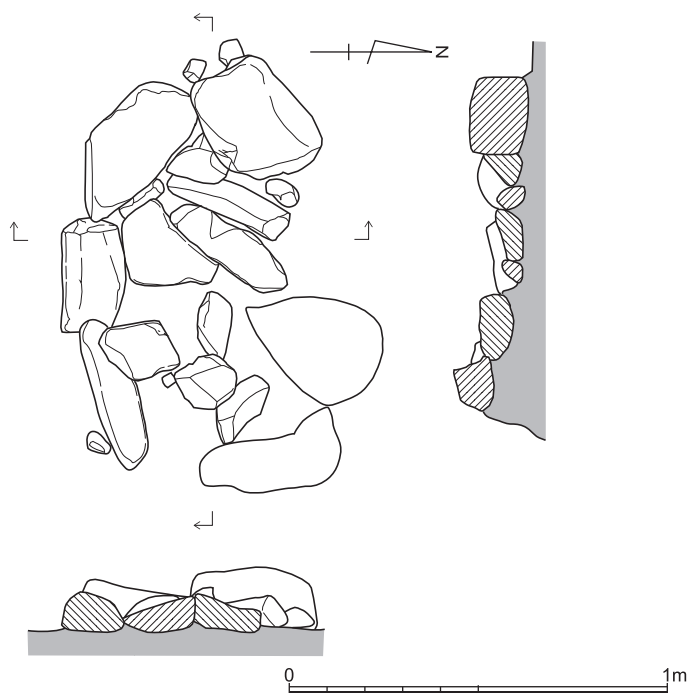


図10 配石V号, 配石VI号 縮尺1/20

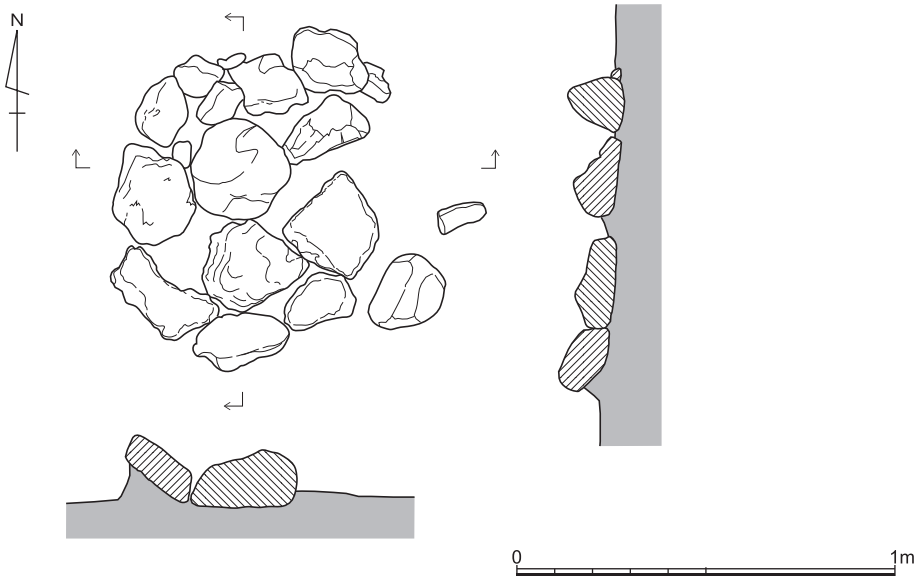


図11 配石Ⅶ号 縮尺1/20

配石Ⅶ号（図版11，図11） 調査区南辺中央のb－1区に位置する。径0.9mのほぼ円形に人頭大の自然石を敷き詰めている。B3タイプの配石である。

配石Ⅷ号（図版11，図12） 調査区南西辺のc－1区南端から南側拡張区に位置する。南北1.2m，東西1mの範囲に自然石が密集する。骨片出土。配石下部に土坑が存在し，土坑下部に近い地点より土製耳飾（図63－1）が出土している。A1タイプの配石である。

配石Ⅸ号（図版11，図13） 調査区北東拡張区に位置する。南北，東西とも0.6mの範囲に自然石を4個置いている。下部に，横位に置かれた土器を埋設する（土器埋設7号）。B2タイプの配石である。この配石Ⅸ号の北，約1mには土器埋設6号が位置し，配石Ⅸ号および土器埋設6号を覆うように自然石が認められる。これらは，配石として認定しなかったが，配石を構成した一部の可能性も考えられる。

配石Ⅹ号（図12） 調査区南西拡張区で，配石Ⅷ号の東，約2mに位置する。南北0.7m，東西1.1mの範囲に自然石を置いている。B3タイプの配石である。

（3）土器埋設遺構

土器埋設1号（図版12，図14） 調査区北端中央，b－5区に位置する。底部を打ち欠いた無文深鉢を正位に埋設している。胴部から下が検出時では位置を保ってみつかった。したがって，土器埋設時に頸部付近までしか埋めなかったか，あるいはその後の削平など

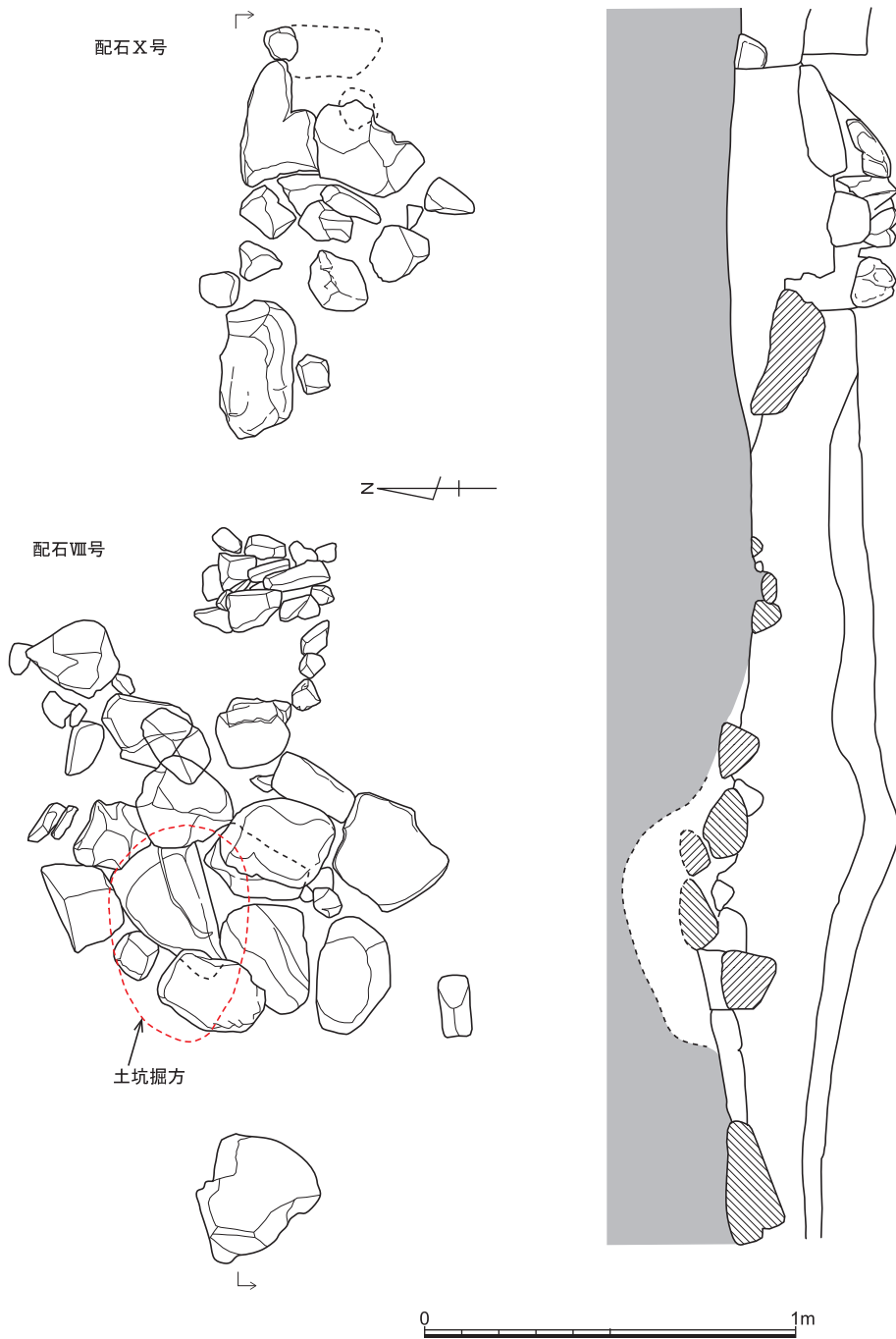


図12 配石Ⅷ号, 配石X号 縮尺1/20

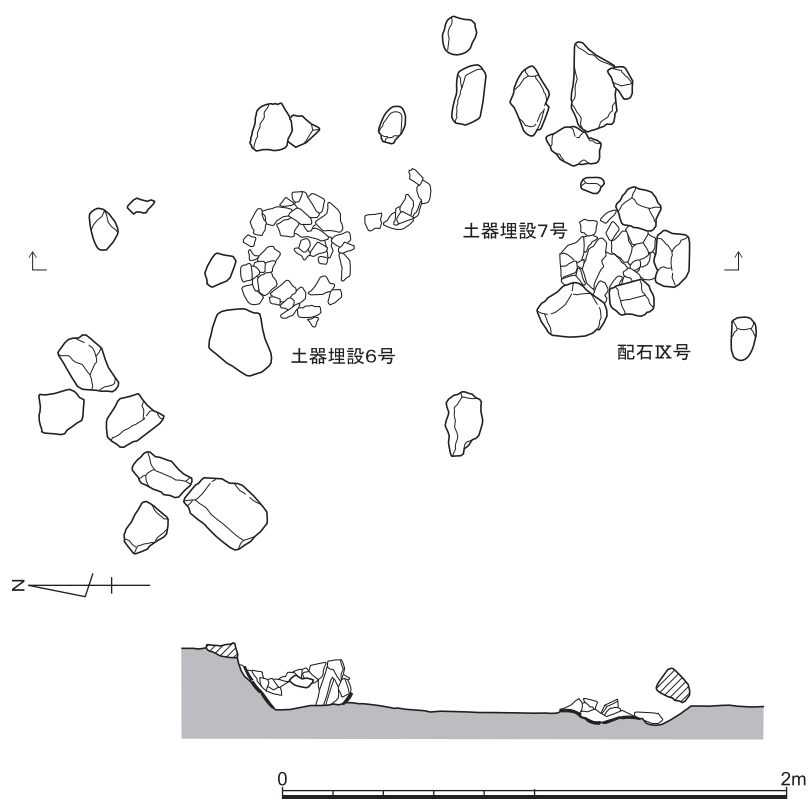
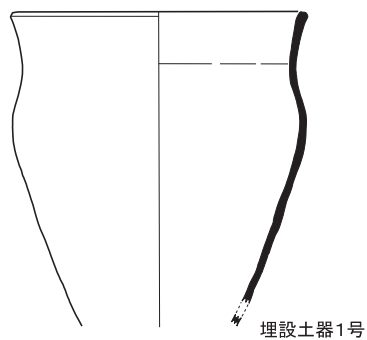
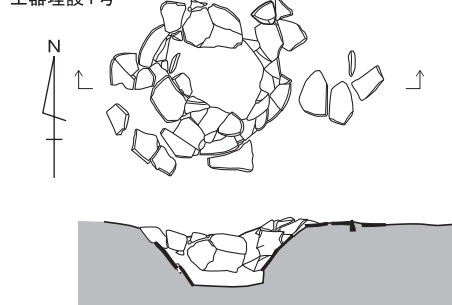
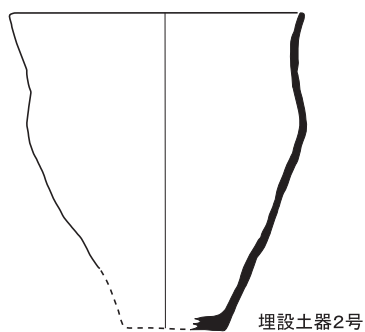
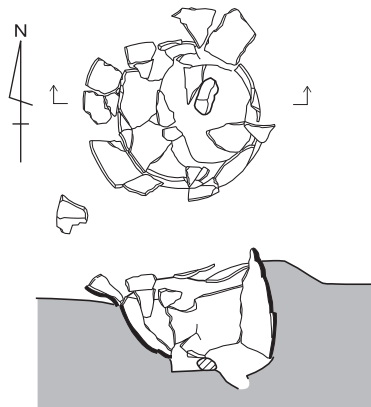


図13 配石IX号，土器埋設6号，土器埋設7号 縮尺1/30

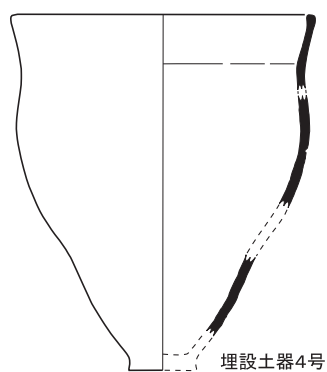
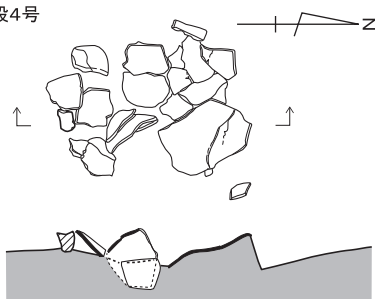
土器埋設1号



土器埋設2号



土器埋設4号



0 50cm

0 40cm

図14 土器埋設1号，土器埋設2号，土器埋設4号 縮尺1/15

で頸部付近までが露出してしまったために、口頸部は壊れて元の位置を保てなくなったと考えられる。

土器埋設 2 号 (図版12, 図14) 調査区北西辺の c-4 区に位置する。やや西に傾くが、無文深鉢が正位に埋設される。底部付近が半分ほど打ち欠かれているが、残りはよい。

土器埋設 3 号 (図版12・13, 図 9) 調査区東辺の a-3 区と a-4 区の境界に位置する。無文深鉢が口縁部を西に傾けて斜位に埋設されている。内部から骨片が出土している (図版13-2)。底部中央が径 4~5 cm で打ち欠かれているほか、口縁部から底部にかけて 1/4 ほどが欠損している。この欠損部は上側の面にあたるが、この部分に配石 IV 号の西端の礫が覆い被さるように出土しているという調査所見が残されている。上部側の欠損は、配石 IV 号構築時におこなわれた可能性が高いということになる。

土器埋設 4 号 (図版13, 図14) 調査区北西辺の c-5 区に位置する。口縁部を北向きに無文深鉢を横位に埋設している。口縁部から底部にかけて、2/3 ほどを欠損している。

土器埋設 5 号 (図 9) 配石 IV 号の下部の土坑内に、口縁部を北向きに横位に埋設されたもの。

土器埋設 6 号 (図版13, 図13) 調査区北東拡張区に位置する。無文深鉢が正位に埋設されている。底部を 2/3 ほど、打ち欠いているが、口縁部から底部まで残りは比較的よい。土器埋設 1 号同様に、検出時には胴部から下が原位置を保ってみつかった。土器埋設時に頸部付近までしか埋めなかったか、あるいは口頸部まで埋め戻したが、その後の削平などで頸部付近までが露出してしまったために、口頸部は壊れて元の位置を保って出土しなかったと想定できる。

土器埋設 7 号 (図13) 配石 IX 号の下部で検出された。頸部無文の縄文地深鉢を横位に埋設している。口縁部から底部にかけて、1/2 強を欠損する。

〔参考文献〕

- | | | |
|------|-------|---|
| 泉 拓良 | 1978年 | 「京都大学北部構内の地形復元」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』 |
| 清水芳裕 | 1985年 | 「自然地形の変化と遺跡の形成過程」『第四紀研究』第24巻第3号 |
| 富井 眞 | 2005年 | 「京都白川の弥生時代前期末の土石流」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2000年度』 |